

第2章 ケーススタディー

1 - 1 . 小学生の事例

現在の状況においては、「インターネット依存」症と呼べる顕著な事例はほとんどないが、IT化が進む中で、小学生においてもネット使用率が高くなってきているため、今後、そのような問題に対する対策が必要となると思われる。

事例

最初に相談に来た訴えというのは、非常に緊張が強いということ、学校などでも体がこわばって体育の授業ができないなど、かなり緊張が強い人である。それから、小学校低学年、もっと厳密に言うと、3歳ぐらいからほとんど家の外では言葉をしゃべらない。発せない。家の中ではすごく饒舌だけれども、言葉をしゃべらない。場面緘黙の事例である。

幼稚園自体には喜んで行くのだけれども、口はきかない、しゃべらないで友だちもいなかった。小学校2年に近所に転校してきたころから、まばたきチックが出て、非常に疲れて帰ってくるようになった。教室では、かろうじて発表はこのころはまだしていたが、ほとんどしゃべらないで表情も硬かった。4年生になって体育も休みがちになり、本読み、あるいは音楽で笛を吹いたり、リコーダを吹いたりということがあったが、それも全く動かなくなって、人前では声を出さず、あるいは笛を吹くことすらやらなくなったということで、その時点で小学校長からカウンセリングへ行ってみたらどうだということで勧められたそうである。

まず最初のころは、3歳児のころに長女の人非常に母と反発していたとか、それから母の父がそのころ亡くなられてて、遺産にまつわって家中がいざこざあったとか、それからちょうど下の子が生まれたのがそのころだった。それから夫もほとんど家に帰ってこられなかったというふうなことで、この3歳ぐらいの時期にクライアントの面倒をきちっと見切れなかったというお母さんの罪悪感がかなり強いという印象があった。その辺が母のこの子に対する贖罪的な形で出てきているかなと思って、相談に来られたんだらうなということである。

小学校6年に入ってコンピュータで絵をかくようになる。一日中その絵をかいている。いわゆるお絵描きソフトで。それで絵をかくようになる。5月になって修学旅行が近づいてきて、ちょっとテンションが上がってきている。家では浮き浮きしているという報告がある。

最近は何時間もお絵描き掲示板にはまっている。休み中はずっとやっている。これが大体6年生の終わりころの事例。この辺からだんだんネット中毒に絡むような話が増えてくる。

インターネットの子どものページにどっぷり、1カ月で大体2万円、60時間ぐらいアクセスしている。それもこの子は言葉をしゃべらない。学校ではほんとうにほかの子と、相手はしてもらえるのだけれども、話もすればできるのだけれど、話をしない。交流はするけれども、コミュニケーションをしない。ところが、そういうインターネットを通じてのコミュニケーションができていて、それをしているのだと思うと救われる部分もあるということをも母が言っている。この時期はまだダイヤルアップで、フリーアクセスのような形になっていなくて、従量課金制だったので、2カ月で電話代が6万円、ネット絡みで6万円かかった。

メールをやっている相手はいい人が多いのだと本人は言っているという。ネットの友人は学校の友だちよりもおもしろいと言っているという。このころメールの相手はかなり多岐にわたっていて、近所の人だけでなく、要するにお絵描きとチャットである。自分の書いた絵を掲示板に載せて、それに対してコミュニケーションする。リアルタイムでチャットもしているようである。そこへアクセスしてくるのが、かなりいろいろなところから来ていて、特に海外の人がある。いわゆる帰国子女の前で、帰国する前の子女たち。海外在住の人の子どもたちともそういうところで知り合って、いろいろな国の情報も得ていて、親がびっくりするようなことをよく知っているというような話をしていた。

あと中学校に入る直前、小学校6年の終わりぐらいの、2月、3月、最近反抗的になってきたという。

中学校に入り連休に妹と、京都から島根か鳥取に飛行機で2人だけで行った。フライトアテンダントとも話をしていたらしい。このころのネット接続状況は掲示板に毎日1時間ぐらいアクセスしているということである。と思っていたら、5月の段階でネットが1カ月で175時間計上されていたらしくて、この時点ではもう既に定額制の状態になっているので、時間だけがカウントされて、月175時間ですから180と考えて、1日平均6時間である。だから休みの日は、ほぼずっとやっている。これは小学校6年の終わりの春休みの間だったと思う。

インターネットは4時間から6時間ずっとやっている。凝り出すと数カ月からその間はずっと一生懸命やっている。担任の先生とメールをやりとりしている。ただ、田舎へ帰ってコンピュータのない場所に行くと、それなりにほかのことを一生懸命やっているし、それもできているので、インターネットがないとだめという感じではないだろう。それがちょっと救いになっていると言っていた。これぐらいはまる人というのはほかの要素も持っているなということを感じた。

緘黙というのは、話の内容はわかっているが、表現しようとしめない。緘黙の人は、ただ言葉をしゃべらないだけで、コミュニケーションはできている。本事例もインターネット

利用がいい影響を与えたのだらうという解釈になるかというところは微妙である。実際この状況だけを見ると、ネット中毒にかかっている。しかし、確かに多いけれども、それをもって何かそれが原因となって、それこそ問題のある何かをすることはない。むしろ救いになっている部分がある。

一般的に言えば、緘黙の人が、自分が生きられる場所をバーチャルな世界、というか、とりあえずインターネットの中に見出したと捉えることも出来る。

お絵描きソフトをやっていて、そこでいろいろなメールを添付したり、掲示板にアップロードしたりしています。確かにインターネットと一緒にいる時間というのは長いようですけれども、それを「インターネット依存」というのはよくわからない。だからどこで定義するのか、一番難しいところである。

インターネットを介在として何かの症状が出ているならばわかりやすいのですが、この子の場合、場面緘黙というよりも、最初に過緊張があって、その後にインターネットという経過だから、ネットによるいろいろな要素というのは見えにくいのだろうと思う。

いろいろなケースで、1日2時間という約束が頻繁に行われている。そうすると時間がネット中毒の基準にはならない。2時間ですよと言われて、まじめにそれを守っている子どもは2時間しかやっていないわけだから。しかし「インターネット依存」だと言われればそうかもしれない。

1 - 2 . 中学生の事例

事例1

A君は、平成9年ごろ（小学5年生）父親の影響でパソコンに興味を持ち、古いパソコンをもらい、インターネットをつないで、のめり込んでしまったせいで、勉強がおろそかになったのだと思われる。

中学校ではコンピュータ部に入部。その中学校は文部科学省の委託を受け総合的な学習を進めていたため、パソコンの技術指導が進んでいた。そこで彼の能力は開花し、先生方にも認められ、もちろん技術家庭科の授業でも認められ、生徒からも教師からも一目置かれるような頼られる存在になった。

故障したコンピュータを直すのも彼を呼べば絶対大丈夫という評価であった。インターネット上でみんながメール交換を始めたばかりで楽しくしている頃、ちょうどインターネット上でウイルスがはやってきたときに、そんなウイルスも彼に頼めば、家のサーバからワクチンを取り、インターネットにつなぎワクチンを取り出してみんなの家を回ってくれたりした。「やって」と頼めば、「じゃあいいよ」というような子であった。自分から「やるうか」とか、「こんなのあるよ」って見せびらかす子ではなかった。

休日は父親や兄弟と出かけて電化製品を買ったり見たりして、家族全員がコンピュータ

関係には理解者であった。父親がすごい技術とか情報モラルとか、そういうルールなどは教えていたようである。わからないことはインターネットを使って、とことん勉強するというふうな性格である。

自分のホームページを公開しているのだが、中学校2年生でもう掲示板の管理人になり、家に帰ると掲示板のチェックをして、チャットなどに参加している（自分が運営しているかもしれない）。そのホームページについて、「先生にだけ教えます」と言ってアドレスを教わり、見てみたところ、少女向けアニメのキャラクターについての情報交換をメインとしたホームページであった。中学校2年生の男の子がこういうのが好きなのか、と思ったが、彼のホームページにはかなりのアクセスがあり、男の子も女の子も、大人から子どもまでいろんな子がアクセスをして掲示板で情報交換をしていた。

また、そこで知り合った女の子と待ち合わせして会っていることもある。それを「先生どうしようか」と教師に相談してきた。「そういうのはやめたほうがいいんじゃないの」と話をしたら、いろいろ調べてみて、「自分なりに考えてみます」と言い、実際に会ってみると中学校3年生、1級上の女の子だったので問題はなかったようである。

特定の教師とメール交換をしていて、何かやり過ぎそうなときは、教師もメールを送り、そうすると「はい、わかりました。先生、それ以上はやらないようにします」というような子で、教師は、コントロール可能な状況と判断できる状況下で観察をしていたが、そういうきちんとした考えを持っていた子である。

実際に今、高校に行っても、まだインターネットでかなり活躍しているが、高校進学するときも、就職しよう、高校なんか行っていないでインターネット関係で僕の技術をわかってくれる人がいれば、ということで、中学校3年生で就職活動をした。父親も手伝って幾つかの会社を回ったが、やはり年齢が若いということで、もうちょっと勉強してみればということを言われ、希望ではない高校というか、自分は高校には行きたくなかったのであるが、情報関係の専科の普通高校に進学した。今は、それなりに楽しくやっていて、彼の家に数名の生徒が集まり、アニメ関係でわいわいと盛り上がるなど、友人もとても多いし、彼を信頼している子も多い。友人も家族ともうまくいっているし、人の嫌がることを言うなどは、一切しない子である。

A君の場合には「インターネット依存」傾向というよりもパソコンにはまっているという感じである。パソコンがなければ、たぶん生きがいが無い。部活に所属していたので、ワープロ検定とか情報処理検定も中学生で受けさせていたが、一度も受からない。結局、情報や、知りたいことはみんなインターネット上から知っていたため、そんなことを暗記しなくていいと考えた。「先生、暗記する必要ないです。出せばいいんですから」という、漢字でも何でもパソコンから全部出せば漢字は書けると話す。読める、書ける、英語もできる。でもパソコンがないと全然書けない。

事例2

B君の場合は、中学校でコンピュータ部に入部し、パソコンと出会う。一人っ子のため親もねだられるままにいろいろ購入して与えた。最新のものを与えている。買ってもらったお礼に、母親の役に立つように文章を打ったり、チラシを作ったり、家のスケジュール表というのを作ったりなど、自宅で活躍していた。

その後学級でも掲示物を作るようになった。パソコンを使いたくてしょうがないという感じで、「先生、何々つくってあげようか。これ作ってあげようか」と言って、いろいろ作ってくれた。でも気がつくとも、教員のところによく来るのだが、休み時間に一緒にいる友だちは1人もいなかったという状況であった。

A君はB君と部活で知り合う。A君の会話というのは自分の技術を見せびらかすわけではないのだが、B君はそれを聞きたがり、知ったかぶりをしてA君の話を引き出そうとするので、A君にとっては、「この子は頻繁に嘘をつく」というふうを感じ取られた。

A君との会話に合わせて嘘をつくことが多くなり、A君はそれが心配でB君に対して警戒をするようになった。B君のそばにいるのは危ないんじゃないかと。それでA君そのものも、顧問の教師に「先生、B君気をつけたほうがいいですよ。かなり危ないんじゃないかな」ということを言ってきた。教師は最初は何を言っているかよくわからなかったが、そのうちにある事件が起きた。

B君も、A君と同じで趣味はアニメーションで、別のアニメキャラクターのファンであった。ブームもあり同じキャラクターが好きな子がたくさんいるにもかかわらず、彼は孤独だった。とにかくA君に近づきたかったが、A君に拒否されたもので、B君はA君がやったかのように見せかけてインターネットからの画像を使い、クラスメートに嫌がらせを始めた。具体的にはインターネットの画像を使って、ある数名の女子にすごく嫌らしい手紙を送るという行為であった。

それがどうA君に影響するかというと、A君がいつも使っている学校のパソコンからその画像を引き出した。その後調査したところ、B君の家のパソコンからは悪用された画像がたくさん出てきた。人になりすます「なりすまし」で、自分ではないように見せかけ、陰で見ながら、人がとても嫌がっているのを眺めていた。それが発覚して一度指導を受けた。それにもかかわらず、また次に、インターネット上のメールの中で、クラスメートの女子生徒になりすまして、部活の男子生徒にラブレターを書き始めた。そのラブレターについて、半信半疑、でもメールを続けていくうちにだんだんおかしい状態が出てきて、子どもものほうから「どうも私の名前が使われている」とか、「僕の相手はちょっと違うんじゃないか」と気づき、なぜかB君がそれを知っているというので混乱した状況になった。B君を問い詰めてみても、本人は自分がやったとは絶対に認めなかった。どんなに問い詰めても本人は「知らない」と。

状況があまりにもひど過ぎるので、教師が親に許可をもらい、本人のパソコンをあけてみたところ、成りすましメールがたくさん出てきて、B君の行為であったことがわかり、本人を指導した。母親も驚いて、今まで親の前では全くそんなふうでもなく「そんなことがあったんだって」と、まるで人ごとのようにその事件を語っていたりしたそうであった。

両親はどちらもコンピュータは全然使えなかったので、彼のコンピュータをいじることはできなかったし、何をやっていたかも知らなかった。その事件があり、もうパソコン室も出入り禁止にしているにもかかわらず、指導後も何もなかったかのように平然と振る舞う様子がみられた。

3年生になってからは、もう何も事件はなかったが、教員は彼のことは信用していない状況がある。普通の子どもなら泣いて許しを請うたり、もう絶対二度としないと、素直な面があるが、B君にはそういう態度が感じられなかった。

本人はまじめで学力優秀である。高校も難度が高い高校に進学した。言葉遣いも丁寧である。家族とはとても仲がいい。特に母親と仲がいい。教員からも手伝いを頼まれる。特に、とてもまじめな社会の先生とか、そういう先生からは頼りにされていた。しかし友人と呼べる存在は、学校にもメル友にもいなかった。メル友の相手は、メル友になろうとしても数回でみんな終わってしまい、結局女の子になりすまして部員の子たちとメールをしていただけであった。

その事件後、B君に対しインターネットの接続は禁止になり、いったんは親も取り上げた。親は、うちの子がそんな悪いことをしたとは思えないと、まだ半信半疑のようであった。その後彼が説得して、2カ月ぐらいで、すぐまたネットに戻ってしまった。要するにインターネットをしていないと、しつこく親に頼み込むし、穏やかだった子がおかしくなったという相談が母親からあり、状況からしてインターネットを続けたほうがいいのかもわからないということで学校側も許可して、親のほうも再度やらせるようになった。

それ以後は、異常な行動はなく、中学校3年生になったときには普通であった。だから中学校2年生のときにそういう事件が発覚してよかったんだなと思いつつも、もっと大きくなってからまたやったらどうなるんだろうという思いがある。まだ中学校2年生だったので、犯罪事件ではなく指導を要する事故で済んだといえる。

ちょっと自閉的なところと、あとは対人関係がゆがんでいると思われる点がある。要するに、友だちと話すときも、ばかにしたりしなくては会話にならないようである。教員と話すときも、「先生、そのぐらいできないんですか」とかというような言い方をしたりし、相手を「そうだよ」と受け入れることはしない。会話の中に、常に相手を小ばかにするような言動がみられる。それと、これは関係あるのかどうか分からないが、男子なのに「何とかなのよ」というような、やや女性口調で話す特徴がある。

B君の場合は、「インターネット依存」症といえよう。友だちがいない分、ネットを常に

あけている状態がある。多分、教師や周囲が知らないだけで、通常の交際範囲とは全然違うネットの友だちはかなりいるのではないか、と思われる。

1 - 3 . 高校生の事例

事例 1

A君は、インターネット上に自己表現の場と連帯意識を求めた。マンガもアニメもゲームも好きで、体が弱くもともと休みがちな生徒であった。趣味に対する知識の量はすごく、同年代の友人を圧倒する。逆にA君の話に付いてこられる者は近くにいなかった。

A君は家でインターネット接続したことをきっかけとし、自分の趣味のWebページを公開した。Webは反響を呼び、トップページに記載したA君のメールアドレスに対して、複数の共感する仲間より励ましのメールがあった。A君は、自分のWebサイトを通じて知り合った仲間とはメールでやり取りをしていた。いわゆるメル友(メール友だち)である。「メールだから話せることもある(A君談)」ということで、だんだん数が増えてくる。深夜にメールを送ったものが、朝には返事が来ているかもしれないと調べたくなる。ほとんど寝ないで朝もチェックする。だんだんとメールチェックが義務化していったのである。ネット上ではA君の持つ知識は「おたくの戯言」ではなく、尊敬すべき知識となる。

趣味の発表の場であったインターネットが、質問メール等で調べることが必須となり、趣味の深化を強制させられている。それにも関わらず、A君は楽しいと話す。「ネットを使っている時だけ、本当の自分になれるような気がする」と語っている。彼は次第に朝も起きられなくなり、また学校に来る理由も無くし、欠席するようになっていった。

「インターネット依存」症を利用時間で規定するのであれば、A君は間違いなく「インターネット依存」症に分類されるであろう。しかし、彼は「活動の場(中心)をネットに移しただけ」と語る。友だちとの交流もなく学校で活動するよりも、自分の話がわかってもらえる(尊敬してもらえる)ネット上の世界に意味を見いだしていた。「学校やクラスなんて、たまたまいっしょになっただけ。それだけで友だちとは呼べない。話の合わないクラスのメンバーよりも、ネットの仲間の方が親しいと感じる(A君談)」。遠く離れた一度も見たこともない、合ったこともない人物に親しみを感じ、仲間として認識していたのである(A君は同じクラスの友人は友達とは呼ばずにメンバーと呼んでいた)。それは趣味の上で交わされる、情報が取り持つ友情なのである。

事例 2

メールでのやり取りは、ある程度の匿名性は保証されるとしても、結局は個人との対話となる。これに対して掲示板は、完全に匿名である(と思いこんでいる)。掲示板利用でネ

ット中毒に陥ったB君の例を紹介する。

B君が学校のパソコンにちょっとした悪戯をしたことから呼び出し、ゆっくり話をした。B君は身体は弱くはないが、気が向かないと学校を休むというタイプの生徒である。たまに出てきて授業を受けたが、退屈だったのでパソコンに悪戯をした。そこで、話をすることで彼の行動が明らかとなった。

B君は掲示板荒らしを常としていた。最初は掲示板を注意深く読むだけで、自分の発言を書いたりはしない。しかし、ちょっとでも内容にミスを見つけたり、自分と異なる意見だと猛烈に攻撃的な書き込みを行う。B君も知識量が豊富なため、いくらでも議論することができる。B君もA君と同様に、やはり自分の考えを述べたい。知っている情報を話してみたい。誰かと意見を交わしたい。しかしコミュニケーションの仕方が稚拙なため、失敗してしまう。自分の意見が受け容れられないと、無意味な発言を繰り返したり、書き込みを妨害して、他の利用者のひんしゅくをかう。受け入れられていないのに、そういった行為がやめられなくなっているのである。ある程度の問題行動を続けると、今度は異なる掲示板に移り住む。これを繰り返す。いまや多くの大手Webサイト（検索エンジンやネットショッピングなど）も掲示板を持っているし、個人が運営する掲示板も数限りなくあるため、移動先には困らないのである。しかも、しばらくすると別人になりすまして再び元の掲示板にも書き込みを行っているそうである。そもそも、最初から複数の掲示板の動向を読み、書き込みも同時に行っている。掲示板ごとに別々の人格を持ち、そのように振る舞うが、受け入れてもらえないときの行動は同じ、破壊的行為である。相手とのコミュニケーションに深く関わっているわけではないのに、長時間の利用をやめることができなくなっているB君。これも情報の海におぼれて抜け出せなくなっていた、依存のひとつのタイプである。

彼らはインターネットを利用することを「ネットする」と呼ぶが、ネットしている間だけ楽しくて、あとの生活は退屈なのだそうだ。A君は現実のコミュニケーションは苦手だったが、ネット上ではうまくいった。B君はどちらもうまくいっていない。しかし、依存から抜けられないのは、どちらも同じである。

事例の高校生の家庭環境は、どちらも裕福であるという特徴がある。両者とも自分のパソコンを持っている。A君は自分のデスクトップパソコンを親から買い与えられ、その後ノートパソコン（中古ではあるが）も買い足している。B君も自分のノートパソコンを常に持ち歩いていた。B君は普通教室にもノートパソコンを持ち込んで、ノートの代わりに使っていたいわゆる変わり者である。A君が目立たない存在であるのに対し、B君は日常の行動にも他者と異なる部分が目立っていた。2人の話を聞くと、多くの知識や情報を有していて、それを発信する場所や機会が無く、自分が認められていないと感じていることがわかった。